

塚越芬太郎著

家庭史譚

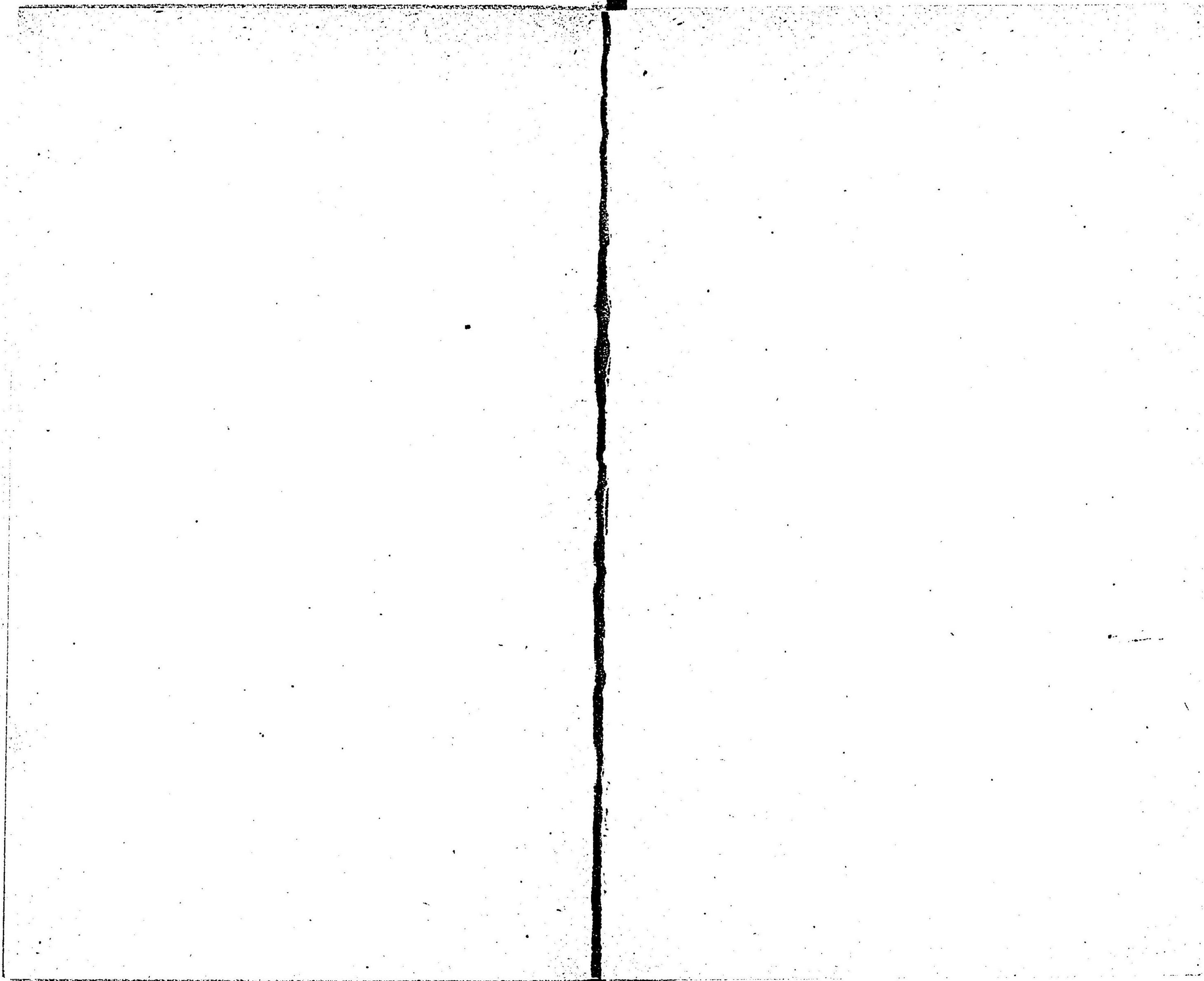
二月の巻

日本の建國

東京 警醒社書店

225

900



特20
584

塚越芳太郎著

國家發展史譚

日本の建國

二月の卷

明治

38 1 8

内交

東京 警醒社書店





家庭史譚序

吾輩の知人の家で、家庭史談會と云ふのを開いて居りますが、大分面白い仕組で、興味もあり、利益もあること、思ひます。其は何う云ふ仕組であるかと云ふと、同家の娘の花子が書いた記文に精しく記してあります。

家庭史談會設立の記

花子

私の家は父と母と弟の太郎と次郎と其に私の五人で、楽しく暮して居ります。私は今茲十六歳に成り、高等女學校へ參つて居りますし、太郎は十三歳、次郎は十一歳で、共に小學校へ通つて居りますが、夜に成ると一家打集つて、種々

家庭史譚序

の御話が御座います。

或夜の事で御座いました、母から御話が出まして、家庭史談會と云ふものを設けることに成り、先發起會と云ふのを開いて約束を決めました。即會員は家内の五人で、父が講師に成り、母は司會者と云ふので、當日は母から御馳走を拵へて戴く筈です。其から講話を筆記するのは、未熟ながら私が命せられましたして筆記致し、其筆記は、或先生へ願つて潤色をして貰つて、『家庭史譚』と名付け、此は家へ保存する筈で御座います。

また發起會の席で、全會員相談の上、多數決で豫め一年分の題を撰定致しましたが、其題は

- 一月會 篠端の富士(太田道灌の事蹟)

- 二月會 日本の建國(神武天皇の事蹟)

- 三月會 勿來の花吹雪(源義家の事蹟)

- 四月會 日光山の朝霞(徳川家康の事蹟)

- 五月會 稻村崎の落潮(新田義貞の事蹟)

- 六月會 天王山の朝嵐(豊臣秀吉の事蹟)

- 七月會 星月夜(鎌倉開府の事蹟)

- 八月會 謫所の月(菅原道真の事蹟)

- 九月會 陣頭の初雁(上杉謙信の事蹟)

- 十月會 古河城外の落葉(熊澤蕃山の事蹟)

- 十一月會 菊花の影(明治の大御代)

- 十二月會 芳野の雪(源義經の事蹟)

で御座います。

四
 として第一會は一月七日に開會することに成りました。
 當日は定めて面白からうと思つて私初め太郎も次郎も今
 から樂で待つて居ります。尤一日で講話が済まない時は、
 残りは次の休日に開會して之を済ます都合で御座います。

花子が此の記文を拵へたのは昨年の事で、此の史談會は現に引續き
 開會されて居るので御座います。所を此程吾輩が其事を聞込んだ所か
 ら、同家へ參つて種々御話を致し、其筆記を同家へ保存するだけでなく、
 弘く天下の家庭へ分けて世の少年少女へ示し、家庭の話の種にし、以て
 其樂を共にしては如何ですと御勧め申し、漸く其承諾を得たので、訂正
 の上出版をすることに致しました。此「家庭史譚」は則實に其なのです。
 であるから、此「家庭史譚」を見て世の少年少女が歴史上の重なる事蹟を

知ると共に、我々の祖先が何んなに偉大な仕事をした乎と云ふことを
 考へ、身を省みて志を立て、行を修める助になりともしたならば、獨吾輩
 の喜ばかりでなくつて、同家の人々も定めて深く満足されることであ
 らうと思ひます。

明治卅七年一月

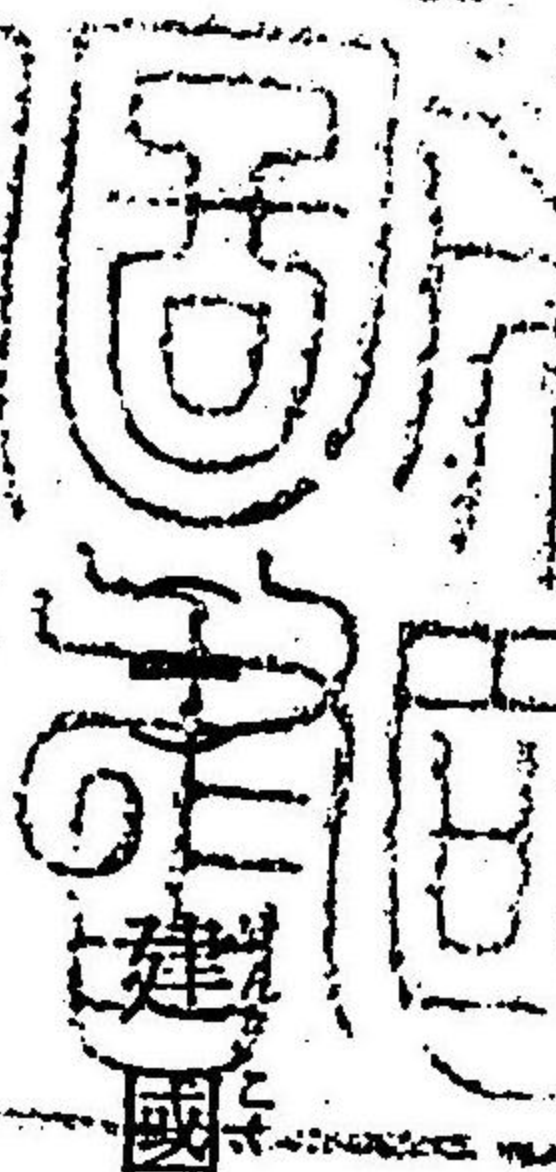
停春樓主人

録 目

- (一) 建國前の日本 第一頁
- (二) 神武天皇 第十六頁
- (三) 建國(上) 第十九頁
- (四) 建國(中) 第三十二頁
- (五) 建國(下) 第五十一頁
- (六) 建國後の日本 第五十五頁

日 本 の 建 國

家庭史譚
二月の卷
日本の建國



建國前の日本

二月十二日は紀元節と曰つて、日本の人は、残らず國旗を樹て、仕事を休で御祝を致しますが、是は昔我が天皇陛下の御先祖である神武天皇様が始めて天子様に御成りなされた日で、日本と云ふ國家は始めて此の日に出来上つたのであるからです。謂は、建國の記念日と申すもので御座います。其故日本の人は誰でも決して此の日を忘れては成らないのであります。

人は銘々其生れた日を誕生日と曰つて記念致すことで御座います

日 本 の 建 國

二
が、其通り國家の誕生日である此日を我が國民は永く記念しなければ成らないに就て、さて此の日が何う云ふ事情で何う云ふ工合に國家を誕生した乎と云ふことを知らなくつては如何に之を記念し様と思つても記念する譯には参りませぬ。其故私はこゝで我が建國の事蹟を御話致し、此の通りの次第であるから我々國民は永く此の日を記念しなければ成らないと云ふことを、篤と合點の行く様に御話致さうと思ひます。

我が日本が何う云ふ事情で何う云ふ工合に建國をした乎と云ふと先づ建國前の斯の土地即ち今日我々の棲息で居る斯の山斯の水斯の野斯の岡が何う云ふ姿であつた乎と云ふことを知らなければ成りません。

して、此の日本と云ふ國家が出来て、神武天皇様が始めて斯の國の天

日 本 の 建 國

子様に御成りなされたのは、今より二千五百六十餘年前の事だとしてありますが、實際は其程に古いのではなくつて多分二千年内外であらうと云ふことです。其處で此の二千年前と云ふものは、今日我々の棲息で居る斯の山斯の水斯の野斯の岡が、何の様な姿であつた乎と云ふと、今日とは大分違つて居て、今日の様な市街はなかつたのであります。今日の様な村もなかつたのであります。のみならず、今日の様な家もなく、今日の様な役所もなく、今日の様な學校もなく、又我々と同じ様な人さへも殆どなかつたのであります。否、全くないではなくつて、場所により、幾らか居たには相違ありませんが、其數は今日の様に澤山あるのではなくつて、却て我々と同じでない人が大分住まつて居たのであります。

すつと昔には、石器時代の人といつて、極々開けない人が住つて居て、

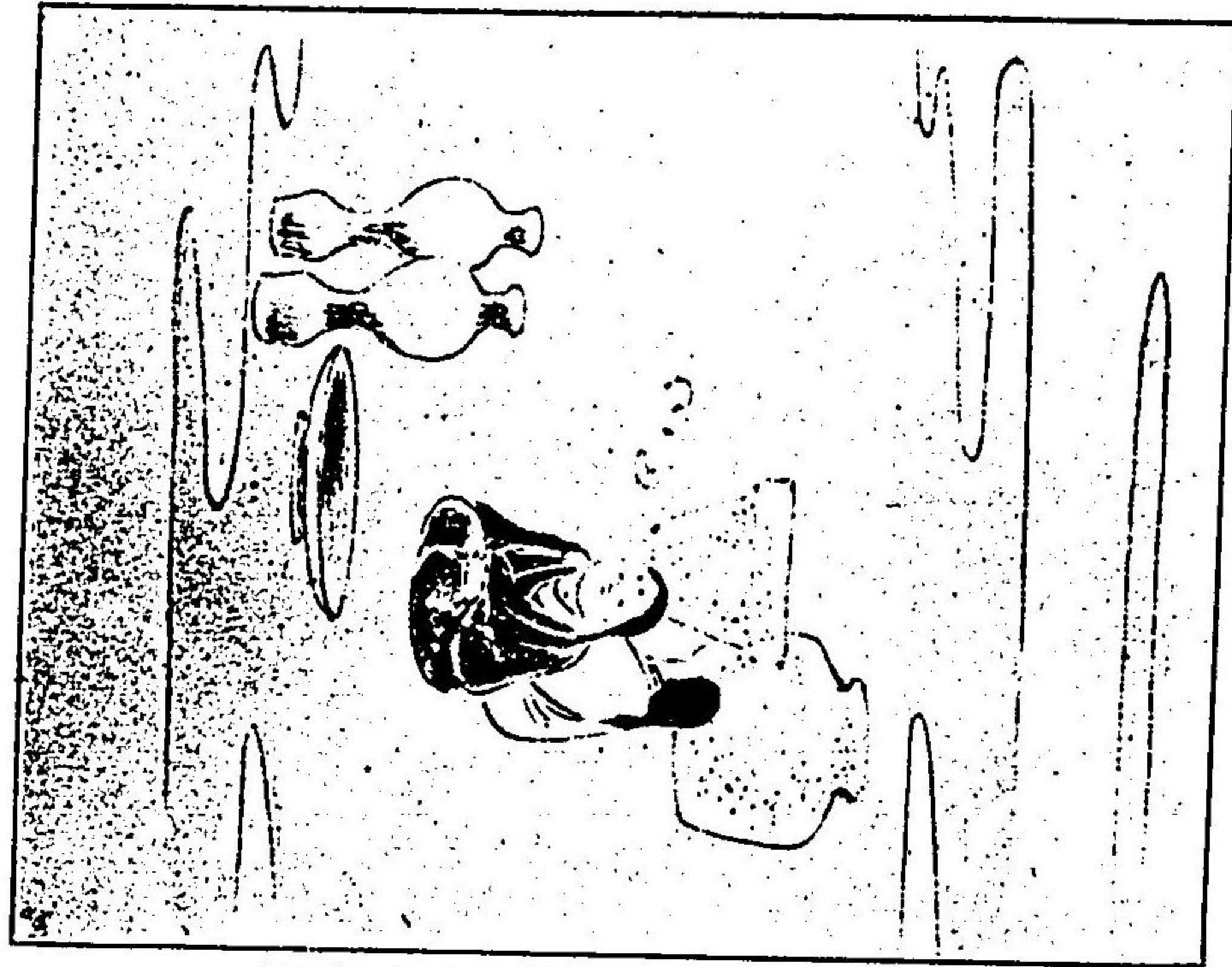
四
 堅穴の中で住居を致し、獸の皮や魚の皮などを其儘に着たり、又植物の纖維で粗末な織物を織つて其れを着用したりして、猪鹿魚類、軟い動物、時としては鯨などを食用にし、石の庖刀やら石の匙やらを使ひまして、土器を拵へ、竹細工を致し、石の鏃、骨の銛、骨の鈎、石又は土で拵へた錘と云ふ様なものを用ひ、さうして獵や漁をして居たのです。或人はこれにコロボツクルと云ふ人民ちやと申し、或は矢張今日千島の丹島に居るアイノの先祖ちやとも云ひますが、果してさうである乎ない乎は、どうも明かには分りません。左様明かには分りませんが、兎に角此の通りの開けない人民が居たことだけは、今に其遺物が残つて居るから確で御座います。さうして此の人民は、南方から來て段々北方へ移つたのでありまして、其關東邊を中心にして居た頃が一番繁昌したらしいと云ふことです。然し此の人民は今の日本國が出來た頃は、

最早此の土地の中央には居なかつた様です。
 今の日本國が出來た頃は、西の方では今の日向、豊後、豊前、肥後、肥前邊から、中央は大和にも、紀州にも、東北は常陸にも、越後にも、奥州にも、土蜘蛛と云ふ人種が居りました。是は土の中へ穴を掘つて其處へ住居をして居る人民で、其故土籠り即ち土蜘蛛と云ふたのでありますが、其穴には、壁の穴も横の穴もあつたらしいのです。獸の皮などを着て居まして、手脚が割合に長く、性質は大分荒々しくつて、其上に狡獪く巧に物を盗たりなど致したさうです。國栖、佐伯、八握、脛など云ふ色々な名があります。其から熊襲とか隼人とか曰はれた人民も是の頃に居りましたが、是は身軀へ黥をするここの好きな人民で、又大分勇悍な種族で御座いました。さうして其繁殖をして居た所は、概して九州の南部であります。」

日本建の國

また今の北海道の土人であるアイノ即ち蝦夷人も同く居りました。多分本洲の中央から東北の方に重に住つて居たものかと思はれます。其外支那朝鮮から来た人民も居り、我々の祖先である天孫人種も居りました。是は重に中國から九州畿内邊へ住つて居た様です。さうして此等は、前の人民に較べると遙に開けて居た人民で、家を造つて其れに住み農業を致し、社會をなして居て、鏡やら劍やら、色々の金類をも使つて居りました。

だが此等の人民は、何れも今の様に纏まつて一緒に國家と云ふものを拵らへて居たのではなく、つて、面々各々に部落を成して互に争ひを致し、闘ひを致して居たのであります。其中でも土蜘蛛と一派の天孫人種とは、神武天皇様が斯の國を御拵へなされる際に大分敵對を致しました。又一方の熊襲人種も、此の前後に餘程敵對を致した様に思



日 本 の 建 國

はれます。所を神武天皇様は、此等の敵對をした種々な人種を御平げに成つて、始めて斯の日本國を御拵へ成され、是から愈國家と云ふものに成つたので御座いますが、其迄には大分年代も手數もかかりました。其次第は斯うです。

是より前に天孫人種の主長で伊弉諾尊、伊弉册尊と云ふ男神、女神がありました。此の二人の神は一旦今の日本の地を御經畧なされたのであります。即ち先づ淡能基呂島と云ふ淡路の西北に在る小さい島へ御降りになりまして、淡路島で御出立の御用意を調へられ、其から今の四國、即ち昔の伊豫の二名の島やら、今の九州、即ち昔の筑紫の島やら、伊伎(壹岐)の島やら、津島(對馬)やら、佐度(佐渡)の島やら、今の日本の本州で昔大倭、豊秋津島と申した處やら、今の備前の兒島やら、小豆島、今の讃岐の小豆島やら、大島(周防)の大島郡やら、女島、今の豊後の姫島やら、知訶の

島今の肥前の五島やら、兩兒島やらを御發見に成り、其土地の酋長を御服從に成りました。或は是の時に殘らず御服從に成つたのではなくつて、中には唯御交通があつただけであるとか、是より前已に御交通に成り、御征伐に成つて、其名を御記憶なされたばかりであるとか云ふ様なものもあるか分りませんが、兎に角是の頃今の瀬戸内海の沿岸から九州山陰道壹岐對馬朝鮮へかけて天孫人種が散居をして居たものと見えます。是が則ち今の日本國が拵へられた手始めで御座いました。

然し此はほんの手始めであつただけで、日本國が出来上るまでにはまだ大分の手がかゝつて居ります。現に此の二人の神達の間でさへ後には御仲違ひが出来て、随分劇しい戦がありました。其中男神伊弉諾尊の方は、後に九州を根據地に致した天孫人種の首長であり、女

神伊弉册尊の方は、出雲を根據地に致した種族の首長でありましたが、葦原中國と曰つた今の畿内が則ち双方の間に争はれた場所であるらしく思はれます。さうして最初は男神の方で出雲まで御侵入に成りましたが、御背進に成りました。當時出雲方の勢と云ふものは餘程盛であつたと見えて、伊弉諾尊は粟の水門でも防ぎ兼ね、速吸門(豊後佐賀關海峽)でも防ぎ兼ねて、遂に日向の橘の小門まで御引揚に成り、此處で御身溜ぎを成されたと云ふことです。

さうして此の男神方即ち後に九州の日向へ據られた天孫人種と、女神方即ち出雲へ據つた一派との争ひは、幾度もあつたらしく、日向方の天照大神様と出雲方の素盞鳴尊との間にも争ひがありました。尤も其間に熯和が成り立つて、天照大神様は高天原を御領分に成さると云

日 本 の 建 國

ふこと、月讀神は夜之食國を領分にするに云ふこと、素盞鳴尊は海原を領分にするに云ふことが御約束に成りました。して、其夜の食す國即ち夜見の國と云ふのは、今の出雲の夜見が濱邊の事であり、海原と云ふのは韓國即ち今の朝鮮を指したちやと云ふものもありますが、其れは兎も角もとして、此の通り互の御領分は一旦定つたのであります。然し、其中素盞鳴尊は頗る勇猛の神でありまして、一時非常な勢で天照大神様の國へ押寄せた事がありました。天照大神様も御自身に御武装を成され、之を御防ぎに成りましたが、其内御姁和が成立つた所から、尊は天照大神様の御國に居ることになりました。

所が此の素盞鳴尊は例の勇猛な方でありますものですから、追々乱暴を御働きに成り、はては天照大神様が天の岩屋戸を閉て、御退隱に成ると云ふ様な騒ぎが出来ました。是の時國中の人民は、何れも天照



日 本 の 建 國

大神様の方へ歸服致しまして、大神様を再び葦原中國の御主君に仰ぎ、素盞鳴尊をば一旦千位置戸即ち今の盛獄とでも申すべき所へ御入れ申しまして、遂に之を御追放に成りました。

其處で尊は其子の五十猛命と共に韓國即ち朝鮮半島へ御渡りに成つて半島に居られました。後棄て、出雲へ御歸りに成り、五十猛命も同く歸られて筑紫の島即ち今の北九州に居られました。其れから命は内海を東へ進で紀州の熊野まで來られたと云ふことが傳へてあります。又出雲の素盞鳴尊の方は、其後大分盛に成つて大國主命と云ふ主長の時代などは、北は今の北陸道から南は今の北九州に至るまでを歸服させ、日向方との争地であつた今の畿内地方をも取つて、玉牆内國と呼んで今の大和へ據りました。

又一方の日向方では天照大神様の子に天忍穗耳尊様と云ふのがあ

り、忍穂耳尊様の子に瓊々杵尊様と云ふのがありましたが、葦原中國はもと天照大神様の御領分である所から、之れを御平げに成る爲めに度々御遠征の兵を御出しに成りまして、忍穂耳尊様御自身も一旦御出發に成つたことが御座いますが、尊様は中途から御還りに成りました。其處で、皇孫瓊々杵尊様が父尊の御名代に御遠征成さることに成り、先づ武甕雷命と云ふ勇將を御遣しの上、出雲方へ御國受取の御命令を御傳へに成りました。所が大國主命及其長子の事代主命は、「天孫瓊々杵尊様は天日嗣で入らせられる、即ち天孫人種御嫡流の總御主長で入らせらるゝから、庶流の我々は従はなければ成らない」と申しまして降參を致し國を御譲り申すことに成りました。唯季の子の健御名方命と云ふのが、仰せに従はずに御敵對を致しましたので、武甕雷命は之と合戦を致し、健御名方命を破つて信州の諏訪湖まで追ひ詰め、以てとうと

う之を屈服させました。此等は、我々の先祖たる天孫人種が、今の日本國を拵へるに就て同人種間に於て相争つたもので御座います。其から瓊々杵尊様は、愈御進發と云ふことに成りましたが、其時天照大神様が皇孫の尊様に、「豊葦原瑞穗國は吾が子孫の代々王に成るべき地であるから、其方は是から往つて之を治められよ。」と仰せられまして、御鏡と勾玉と寶劍とを御授けに成りました。此は斯の日本の土地が一旦伊弉諾伊弉冊の二尊の御經畧で、天照大神様の御領分に成されることに定まつて居た所から此の通りの仰があつたものと見え、其處で天兒屋根命と太玉命とが宰相に成り、天忍日命と天津久米命とが大將に成り、尊を御擁護申上げて、日向の高千穂の峯へ降られたので御座います。

さうして尊様は、知舖の土蜘蛛、吾田の山祇などを従へられまして、今

十四
の薩摩で昔吾田の國笠狭の岬と申した處へ都を御定めに成り、山祗の女を娶られて、其處に居られました。或は一旦大倭を出雲派から御請取に成つた後、西國の方に騒動が出来た爲め、更に御西征に成つたのかも知れませんが、其れとも大倭の方は皇族の別流の人が請取られたのかも分らないが、兎に角此の前後に西國では大分騒ぎがあつたらしく、瓊々杵尊様の子の火々出見尊様は、其兄火闌降命の率ゐられた隼人族即ち熊襲人種と大分御戦争があり、又一方では朝鮮の方から寄せて来た外冠をも餘程御防ぎに成つた様に傳へてあります。

さうして尊様及尊様の子の鸕鷀草葺不合尊様は、共に今の筑前に在つた綿津見國(海國)の君豊玉彦の女を娶つて之に頼られ、日向へ都を置き、西の國々を威服されました。然し其他の地方は、謂ふ所の土蜘蛛やら出雲派を初として別派の天孫人種やらが、あちらこちらへ據りました。

て各部落間で、度々闘が交へられて居るのです。

のみならず、昔の朝鮮の國である新羅の國の王子天日槍など申す人も、大國主命の頃に我邦の人で其妻に成つて居た人の跡を追つて筑紫へ参り、播磨攝津邊で戦争があり、近江から越前の角鹿即ち今の敦賀へ出て、其から轉じて但馬の國まで往き、其處で留まりました。其子孫は、筑紫では筑前の國惟土郡の豪族に成り、但馬では出石の豪族に成りました。又近江へは其連れて来た人民が残り、敦賀では自身が氣比神社へ祀られて居ります。

建國前の日本と申しますると、大畧此の通りの姿であつたので御座います。其を神武天皇様が非常な御骨折に由て統一され、其れから始めて斯の日本國は出来たのであります。

(二) 神武天皇

遠く伊弉諾尊伊弉册尊の時から御着手に成れた斯の日本國を遂に御拵へ上げに成りました神武天皇様は、果してどう云ふ御方であつた乎と申ますと、實に天照大神様の御正統を承け継がれた御方で御座いました。即ち鷓鴣草葺不合尊様の御子に成つて居ります。

鷓鴣草葺不合尊様は、日向の高千穂の宮で御住居に成り、綿津見國の君の娘玉依姫を妃に成され、四人の皇子を擧げさせられました。其四人の皇子は、彦五瀬命と稻飯命と三毛入野命と狹野尊との御四人で、其内御幼少の時狹野尊と申上げたのが、即ち神武天皇様で御座います。して見れば、神武天皇様は四人の御兄弟中、一番末の御方で入らせられたものと察せられます。



日 本 の 建 國

其から神武天皇様の御生れなされたのは支那で言へば東周と申した時代に當つて居ると一般に傳へますが實際は其より新しくつて多分漢と申した時代の初の頃であらうと云ふことです。さうすると西洋で言へば有名な羅馬國が是から大に四方を征服し様と致した頃に相當して居ります。

果して此の推測が事實に近いことで御座いますならば西洋で羅馬國が地中海を真中にして非常な大きい國に成りましたのも支那で漢の武帝と申す天子が四方を征伐して東亞細亞の大部分を領分に致しましたのも我邦で神武天皇様が斯の日本國を御拵へに成りましたのも、はい同じ頃に成つて居ります。氣運と申すものは如何にも不思議なものでは御座います。

また天皇様の御生れなされたのは矢張り日向で狭野と申す處が御

座います、今諸縣郡高原村に成つて居りますが、此處で御生れに成り、日向で御成長に成つたので御座います。して、天皇様は生れながらに大層賢く明達で入らせられ、御意が確如と云ふ様に餘程強くしつかりして入らせられたと傳へて居ります。謂は、御聰明であつた上に沈毅な方で、頗る雄略に富ませられた御方と思はれます。其邊からでも御座いませうか、天皇様は年十五の御時に世嗣の君に御成りなされたと云ふことです。其後吾田邑薩摩の吾平津媛と申す方を皇妃に成されまして、皇子の手研耳命と云ふを擧げられ、御歳四十五の時までは日向に御座あつたと云ふことで御座います。して見ると、天皇様は前に申した通り非常な英雄で入らせられたのであります。猶建國の大業を御企てに成るまでには、大分久しい間機會が熟するのを待つて居られたこと、思はれます。

三 建 國 (上)

神武天皇様は久しく日向に御住居に成りました後、或日兄君達やら御子達やらを御集めに成つて、御相談がありました。天皇様の仰せられるに、「昔天照大神様が豊葦原瑞穗國日本の昔の名を我が天祖瓊々杵尊様へ御授けに成つたに就て、尊様は斯の國へ御降りに成つたのであるが、世が未だ開けない際で、種々な騒ぎがあり、空しく此の西の州で永い間を過ごし、祖父の尊父の尊の御代から今の世までに及んだ。其れが爲め、遠い地方は、部落々に其々の魁首が居て争闘が止まない。又鹽土老翁の話を知くと、東の方に餘程美しい處があつて、青い山が四方を繞つて居て、其處へ天の磐船に乗つて降つたものがある」と云ふことぢや。多分其處が國の真中に成つて居て、大業を成すのに適當した處で

あらうかと思ふ。さうして其の降つたと云ふものは、或は饒速日かも
知れない。寧ろ其處へ往て都を据えることにしては如何ぢやらう乎。』
と斯う仰せられました。所が何れも其は至極御尤の御考で御座いま
すから、早速御實行を成されるのが善う御座いませう。』と直に御賛同
申上げて仕舞つた。其處で愈御實行に成ることに成つたので御座い
ます。

考へて見ると、御歳四十五歳の御時まで日向に在らせられた狹野尊
即ち神武天皇様が、是の時に成つて俄に御東征を思ひ立たれたのは、或
は熊襲人でも御領地へ迫つたので、其が爲め急に御移轉の必要があら
せられたのではなからう乎、其とも國力の御充實を御覽に成つた所か
ら大業を思ひ立たせられたのであらう乎、其邊は何共分り兼ねます。
然し父の尊も祖父の尊も綿津見國から妃を迎へさせられまして、其御

後援を仮らせられました。が、天皇様は一方に綿津見國の娘を御母に成
され、一方に熊襲地方の吾田の君の娘を娶らせられたのであるから、寧
ろ双方の人心を得られて、國勢が大に興つたに就き、遂に建國の洪謨を
御發しに成つたの歎とも思はれます。其から天皇様の御言葉の中に
ある、鹽土老翁と云ふのは、海事に通じて居たもので、多分畿内附近まで
は航海をしたことのある人でありませう。又饒速日と云ふのは、前に
御話を致しました瓊々杵尊様の兄君で、天火明命と申し、武甕雷命が出
雲派の大國主から葦原中國を請受られた際に、大國主の中央政府があ
つた玉牒内國即ち今の大和國へ住居はれ、其地を虚空見大倭國と名を
付け、天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊と尊稱された方ぢやとも傳へま
す。さうすると、瓊々杵尊様が西國へ御降臨に成つて、鷓鴣草葺不合尊
様まで其儘日向に御座あつた間、饒速日命及其系統の方は、葦原中國へ

君臨されたものらしく考へられます。

其は扱置き、神武天皇様は、東征の御相談が御一決に成つた所から、御一族御家來達、残らずを御隨へに成つて御出發あらせられました。是の時北日向の西白杵邊では、多少賊と御合戦があつた歟の様にも傳へて居ります。

其から舟に御乘りに成り、舟師を御引率なされて東へ向ひ、今の豊後の佐賀關海峽即ち昔の速吸門へ御出に成ると、小舟に乗て御迎に出たものが御座います。仍て天皇様の御前へ御召出しに成つて「誰か」と御尋があつた所が「此の地の豪族の珍彦と申すもので御座います。」と云ふ御對を致し、「其方は海路を有じて居る乎。」と御尋に成たら「能く存じて居ります。」と申上げました。「然らば是から供を致す乎」と仰せられたら「無論御供を致して、海路を御案内申上げませう。」と承諾を致し

ました。其故水手に御言付けがあつて、御舟から椎の木を指渡しして珍彦を御舟へ引き入れ、椎根津彦と曰ふ名を賜はつて、御供を致すことに成りました。此の珍彦と云ふのは、鷗瀨草葺不合尊様の弟武位起と云ふ人の子で、當時海部國(今の豊後海部郡)で、佐賀關などは其内です。の君に成つて居た人で御座います。

天皇様の御水軍は、更に九州の岸に沿ふて北へ参り、豊後の宇佐まで御出に成りました。其處では國主の菟狹津彦及菟狹津媛が、菟狹川の上りへ假宮を拵へて御饗應申上げましたので、菟佐津媛を侍臣の天種子命へ御妻せに成り、仍て菟佐の國人を御味方に成されました。天種子命は藤原家の先祖、菟狹津彦は高皇產靈神の後胤で御座います。此邊は當時天孫人種があちらこちらに居たものと見えます。

尋で御舟隊は、今の馬關海峽を西へ出られて筑前の遠賀川口に當つ

て居る岡水門まで御遷りに成り、是處で今の博多灣の岸へ立つて居た
母君の國即ち綿津見國の援兵やら舟やらを御待合せに成つたので御
座います。さうして其處に一年間御駐在に成り、十分の御準備が出来
た上で再び御進發に成り、馬關海峽から内海へ御這入りがあつて、先づ
安藝の國まで御出に成りました。多祁理の宮と云ふのは此時七年の
間御駐軍があつた處で御座います。此は伊豫備後の海上に在る島々
やら其附近やらを御平定に成る爲めかと思はれます。又多祁理の宮
と曰ふのは今の廣島の少し東に成つて居て、昔安藝の國府のあつた處
が其なのです。

其から次は、吉備の高島宮へ御遷りに成りまして、八年間の御滞在が
御座いました。此は多分今の畿内地方へ御進軍に成る御準備と、一方
は出雲派へ對しての種々な面倒を御捌きに成る爲めであらう歟と云

ふことです。兎に角八年も御滞在に成つた所を見ると、大分御難儀の
ことがあらせられた様に察せられます。

然し天皇様は、少しくも御屈撓の御模様はなくつて、御準備が出来、御
滞在の御必要がなくなりますると、直に今の畿内地方を指して御進發
に成りました。是の時御軍勢は、大小の舟を漕ぎ連れ、船と船と相接し
て進まれたと云ふことでありますから、非常な勢で御進軍があつたも
のと察せられます。して、御舟が難波の崎へ御出に成つた際、大分潮の
急いのに御遇ひ成されて、乃ち其處を浪速國と御命名に成つたと傳へ
て居ります。

其から御舟は直に淀川を溯られました。最初から御東征の御目的
が、大和へ御這入りに成るのに在らせられたからで御座いませう。當
時淀川は、大和川を河内に入れて居たのでありますから、多分淀川を溯

日 本 の 建 國

つて、大和川へ御這入に成り、行けるだけは舟で御進軍あらせられ、其から直に大和の龍田へ御進入に成らうと云ふ御軍畧であつたものと見受けられます。

當時大和は、多数の土蜘蛛と若干の天孫人種とが居て、幾多の土豪があつたのでありますが、中にも之が巨魁とも謂つて宜しいのは、長髓彦で御座います。長髓彦は、大和の生駒郡鳥見(今の富雄村邊)の白庭宮へ、饒速日命を奉じて、妹の御炊屋媛を妻はせ、之が擁護者と云ふ様な位置に立つて居たので御座います。多分出雲の大國主の一族であつて、大國主が國を譲つた後、大和に於ける出雲家を代表致して、皇孫饒速日命を輔佐し、更に其子の可美真手命を奉じて居たものであるらしく思はれます。其性質は餘程勇猛であると共に、何分にも剛情我慢が強く、頗る威福を恣まゝにして居た様で御座います。さうして神武天皇様が



日本建國

淀川を溯つて入らせられると云ふことを聞くと、直に軍を興して防禦に出掛けて参りました。

是の時天皇様方は、川を溯つて河内の草香邑の青雲の白肩の津と申す所から陸路へ下り立ち、御舟に置かれた楯を取つて之を列べ、以て陣を布かれたので、其處を後に楯津(蓼津)とも書きますと申します。其から兵を勸へて徑ちに龍田を自當に歩行で御進軍に成りましたが、何分にも路が狭く且つ險しくつて、並で行くことが出来ない所から、還つて膽駒山から大和に御道入りに成らうと云ふことに成り、遂に孔舎衛坂と申す所で長髓彦の鳥見の兵と御會戦に成りました。即ち今の有名な暗坂で御座います。長髓彦方は、こゝが詮度の戦であるといふので、其ある限りの兵を出して之を防ぎましたのみならず、先づ要害の場所へ陣を取つて待ち掛けたので御座いますから、天皇様方に取つては大

分不利な戦で御座いました。然し其にも御屈撓がなく、天皇様方は一同に勇を奮つて進撃をなし、頗る激戦に成つたさうです。其が中にも御兄君の五瀬命は、身を挺で、御勇戦なされた所から、御肘へ長髓彦が射た劇しい箭を御受けに成り、非常な痛手を負はされました。天皇様は之を御覽に成りまして、『吾は日の神の御子であるのに、日に向つて戦をするのは宜しくないに依て、一旦引揚げた上廻ぐりく、て日を背負つて合戦をすることに致さう。』と仰せられ、一先づ御背進に成りました。即ち西から大和へ侵入するのは、大分御困難に思召された所から、寧ろ東の方より御侵入に成らうと云ふので御座います。

然し此の御背進は、如何にも御立派な御背進で、流石は神武天皇様の御背進で御座いました。是の時天皇様は戦が頗る難儀であるのを御覽に成りますると、先づ軍中へ命令を下して、『暫く停まれ、もう進むな。』

と仰せられて、其から兵を整へて御引揚げに成つたのです。して前に申しました草香津まで御引揚げに成ると、歩みを御停めに成り、楯を植てさせて、一齊に鬨の聲を揚げさせられました。此の通りである所から、名にし負ふ鳥見彦即ち長髓彦も、別に追撃する様なことをせず、其儘兵を引て歸りました。

其から皇軍は、再び舟で難波へ御下りに成り、攝津和泉の海岸を南へ御廻ぐりがあつて、紀州へ御出に成りました。其際和泉の海で五瀬命が御手の血を洗はせられたので、之を血沼海と名付けたと云ふことで御座います。又紀州の男之水門(紀の川の口であらうと思ひます。)へ御到着に成らせられた時、命は慨然として雄詰びをせられて、『如何にも残念ぢや、堂々たる大丈夫でありながら、彼等如き賤しき奴原に手を負はされて、敵をも討たずに死なうとは、如何にも残念ぢや。』と叫ばれま

して、どう／＼軍中で御薨去に成りました。其故其處を雄之水門と名付けたと云ふことです。此等を見ても命が如何に猛しく如何に勇ましい方であつた乎が推測せられます。命の陵は現に紀州の名草郡竈山にあります。

皇軍は此の邊から一部舟一部陸で、相扶けながら海岸を迂廻されたものと見えまして、此の名草郡では名草戸畔と云ふ賊を御誅伐に成つて居ります。是は多分土蜘蛛部落の酋長で御座いませう。

其れから天皇様は、狹野と申す所を御通りに成り、熊野村へ到られ、更に御進軍に成る際、海上で御舟が暴風に遇はれました。其處で兄君稻飯命は、「あゝ吾が祖先は天神であり、母は海神(海國の娘)でおはするの、何う云ふ譯で此の通り吾等は陸で厄められ、又海で厄めらるゝであらう乎。」と歎息され、どう／＼御引返しに成りました。乃ち筑紫の綿津

見國へ御出に成つて、更に朝鮮へ渡り、新羅王に成られたと云ふことで御座います。又三毛入野命も同く歎息せられて、「吾が母と吾が姨とは海神であるのに、何故に斯くは波濤を起して吾輩を溺れさせ様となさるであらう乎。」と仰せられ、遂に常世國へ行かれたと云ふことです。

如何にも此の時の御遠征は、申すも愚かな程の御困難な御遠征で、日向を御出發に成つてから、筑紫の崗水門で一年、安藝の多祁理宮で七年、吉備の高島宮で八年を過ごさせられ、其から愈大和へ御討入と云ふ時に、長兄五瀬命は御負傷の上、御薨去に成り、遠く紀伊半島を御廻りに成つて熊野浦まで御出に成れば、今度は又暴風に遇はせられ、次兄三兄共に御失望の上、御引返しに成つたと云ふ次第で御座います。御兄君さへ此の通りである所を見ますと、御供を申上げた兵卒共は、定めて非常に失望落膽をしたことゝ思はれます。否寧ろ絶望をして御供に後れ

るものも少なくなることであつたらうと思はれます。其御艱難の程は千歳の今から御察し申上げて、只々涙を掩ふばかりで御座います。

(四) 建國 (中)

神武天皇様の御東征は殆ど申様もない程の御困難で御座いました。然し天皇様は、少しも御屈撓の御様子はなくつて、御困難が愈大であれば御元氣は益壯で、御兄君達が中途で御沮喪の上御引返しに成つたにも拘らず、獨り皇子の手研耳命と兵を率て御進撃に成りました。御舟は漸く荒阪津と申す處へ御着きに成りましたが、是處に丹敷戸畔と云ふ土蜘蛛が居て、御進軍を妨げたので、之を御誅伐に成りました。是の地は亦丹敷とも申しまして、今の紀州南牟婁郡新鹿村が其だと云ふことで御座います。

其から天皇様の御軍勢は山中で毒氣に遇はせられ、一同昏睡して伏しました。所が此の熊野村に高倉下と申すものがあつて、一振の太刀を持つて天皇様の御伏成された所へ參り、之を献上致しました。天皇様は高倉下が參りますると忽ち御目寤めに成りまして、『是は大分長寢をしたわい。』と仰せられ、其から高倉下の太刀を御請取に成り、『全体どう云ふ太刀なのぢや。』と云ふ御尋がありました。

其時高倉下が申上まするには、『私は昨夜夢を見ました。其夢は天照大神様と高皇産靈尊様と御二方が御座ありまして、武甕雷命を御前へ御召に成り、仰せられまするには、葦原中國は専ら其方の討ち平げた國ぢやが、只今亦大分騒ぎに成つて、我が子孫達も餘程困つて居るらしい。就ては御苦勞でももう一度往つて來て貰はねば成らぬと云ふことで御座いました。所が、武甕雷命の申しまするには、是は私が參るには及び

三十四
ません、嚮に私が其國を平げた時の太刀が御座いますから、それさへ遣れば其で御平げに成ることが出来ますと申し、其から願みて私に太刀をお前の倉の中へ墜として置くから、其を取つて皇孫の尊へ献上を致せと言はれました。其處で私は委細承知致しましたと申したかと思つたら、忽ち驚いて夢が覺めました。餘り不思議で御座いますから、倉へ這入つて見ますと、果して此の太刀が倒に床へ刺さつて居りました。仍て只今持参致した次第で御座います。』と、此う申上げました。此時御供の人々も皆覺めて、高倉下の申す事を聽きまして、何れも大に勇み立ちました。此は天皇様が深い御思慮から御供のものを勵まされた御事であらうと思はれます。

斯くて御軍勢は、今の新宮川に沿ふて大和の方へ御進發に成つたので、御座います。當時の事であり、ますから、殆ど路もない所を草木を押

分けて御進みに成るので、其御困難さは今更言ふばかりもありません。殊に山が高く坂が峻しく、どうも路が窮つて行くことの出來ない様に成りました。已むことを得ず、其處で野營を成されましたので、御座います。其夜、天皇様は御夢に、天照大神様が頭八咫鳥を御案内に遣はされると云ふことを仰せられたと御覽に成つたさうです。夜が明け、て見ましたら、果して大きな鳥が空から翔り降つて飛び去るので、それを御覽に成り、『今鳥の來ることは昨夜の夢に合つて居るから、是は必ず天照大神様の吾が事業を御助け下さるのちや。』と仰せられました。鳥の飛び去つた方へ御進軍に成る様に御命令を下されました。其處で、皇軍の大將日臣命は御軍勢を引率して御先驅に立ち、山を抜いて御案内を申上げ、遂に吉野川の川尻まで御出に成りました。日臣命は此の日の手柄に由て道臣命と云ふ名を下し賜はつたと云ふことです。

御軍勢が吉野川の邊りへ參つた時、其處に筥を拵へて魚を捕つて居たものが御座います。天皇様は之を御呼びに成つて「誰か」と御尋に成りました所が「私は贊持之子と申しまして、此の土地のもので御座います。」と申しました。是も恐らくは土蜘蛛種族の人であつた歟と思はれます。

また東へ吉野川の沿岸を御進になると、尾のある人が井の中から出て參りました。即ち獸の皮を着て居た人が、豎の土窟の中から出たので御座います。して、其時井の中に光があつたと云ふことで御座います。すから中に燈火が點いて居たものと見えます。此は言ふまでもなく土蜘蛛種族で御座います。名は井氷鹿と申すものぢやと曰ふたさうです。今も吉野に飯貝村と云ふのが御座います。

其から更に上流の方へ御出に成ると、又々尾のある人が巖を押分け

て出て參りました。言換へると、同く獸の皮を着て居たものか石窟の口を押開けて出たので御座います。是は名を石押分之子と申しまして、天神の御子が御出に成ると云ふので、御迎に出たのぢや。」と申しました。吉野の國、巢種族と云ふのが、此の土蜘蛛の後で、今も吉野に南國巢村など申す處があります。

御軍勢は此等の土蜘蛛を歸服させ、吉野川の上流から北へ轉じて、菟田の穿邑即ち今の大和宇陀郡宇賀志村へ御着陣に成りました。さうして菟田の縣の土豪兄猪弟猪(即ち宇賀志)の二人を御召に成りました。所が弟猪の方は早速參りましたが、兄猪は參りません。さうして兵を聚めて御軍勢を防がうと致しました。が、何分にも兵が聚らないので、新しい家を拵へ、僞つて天皇様を御迎へ申上げ、極簡易なものではあつたでありませうが、兎に角一種の釣天井の様な仕掛を以て、天皇様を

御殺害申上げ様と巧みました。弟狛が其謀を申上げましたので、天皇様は左將軍右將軍とも謂ふべき道臣命と大久米命とを御遣はしに成り、二人は直に馳向つて兄狛を喚び、之を責めて「先づ此の家へ還入つて、何う云ふ工合に天皇様を御馳走申上げる乎、其状を爲て見よ。」と申しまして、太刀の欄へ手を掛け、弓へ箭をつがへて、無理に其家へ逐ひ込みました。其處で兄狛は自分で拵へた釣天井に打たれて死で仕舞ひ、手下のものなどが大分騒いだのを悉く斬り散らしましたので、血が蹠を没した所から、其處を菟田の血原と申したと云ふことです。

又弟狛の方は、是時大分牛やら酒やらを出して御軍勢を御馳走申上げ、以て歸服の實を表しました。其席で天皇様は自ら斯う云ふ御謠を御歌ひなされました。

菟田の高城に鴨一編張る。我が待つや。鴨はさ寄らす勇妙し鯨さ



日 本 の 建 國

寄る。前妻が魚乞はさば立松稜の實の無けくを扱き賜びえね。後妻が魚乞はさばいちさかき實の多けくを扱き賜びえね。え、しやこしや。あ、しやこしや。

此は鳴を御軍勢に喩へ、鯨を兄猪に喩へ、又前妻を兄猪に喩え、後妻を弟猪に喩えられたものと見えます。是を來目歌と申します。

其から天皇様は、菟田の高倉山、今の高見山へ御登りに成つて所々を御覽に成り、またしが、是の時國見の丘に八十梟帥と申して、土蜘蛛の頭目が幾人も居りました。又一方の磐余邑の方にも兄磯城なるもの、兵が居りました。其處で御軍勢は男軍、即ち第一軍を男阪へ置き、女軍、即ち第二軍を女阪へ置き、同時に墨阪へは炭の煉したのを置て、以て賊の襲撃に御備へに成りました。

然し賊は何れも要害の地へ據つて居りまするので、之を攻めるのは

決して容易ではありません。其で天皇様も大分御心配に成りましたが、或夜の御夢に天照大神様が天香山社の中の土を取つて、其で天の平瓮八十枚と嚴瓮とを拵へ、天神地祇を祭るならば、賊が自づと平定致すであらうと御教へに成つたと御覽に成りました。其を近臣に御話に成つて居らせられる所へ弟猾が参りまして、「磯城の邑には磯城の八十梟帥が居り、高尾張の邑には赤銅の八十梟帥が居つて何れも御軍勢に敵對を致す様子で御座います。天香山(大和高市郡)の土を取つて天の平瓮を御拵へに成り、其を以て天社、國社の御祭をなされたならば、賊を御攻めに成るのに大分御便宜で御座いませう。」と申上げました。即ち天皇様の御先祖たる天神と此の土地に居ります豪族の先祖たる國神とを一所に御祭りに成れば、土人を歸服させる好い手立に成るばかりでなく、弟猾の申す所と御夢との一致する所から大分御軍勢を勵

ますことにも相成ります。是亦天皇様の深い思召から出たこと、存じます。

其處で敵の居る所を通つて香山の土を取つて來る爲めに、豊後の海部から御供をして参りました彼の椎根津彦は、纏纒の着物を着け、袈笠を着、老翁の姿に成り、弟猾は箕を着て、老婆の姿に成り、二人で連立つて参りました。其時椎根津彦は神様へ御祈りを致しまして、「若し吾が君が此の國を御平定に成るのが神様の思召で御座いますならば、吾等二人は無事に往つて來ることが出来る様御守り下さい。若し又吾が君の御力では、逆も此の國を御平げに成ることが出来ないと言ふことであるならば、賊が二人の行く道を妨げる様に成されて下さい。」と申しまして、其から参りました。所が賊は二人の様子を見て、「何とさたない老爺と老婆ではない乎。」と曰つて、大層笑ひまして、別に邪魔をする様

な事はありませんでした。

二人が香山の土を取つて参りましたに就て、天皇様は大に御喜びに成り、乃ち八十の平瓮と天の手抉八十枚と殿瓮とに御拵へに成りまして、冊生の川上で天神地祇を御祭り成されました。其から同時に神を御祈成されまして、「吾は今八十の平瓮で水を用ゐず、其飴が拵へ様と思ふが、刃の力を仮らずに天下を平げ得られるならば、其飴が出来るであらう。」と仰せられました。所が飴が自づと出来ました。又御祈りがあつて、「吾は今殿瓮を丹生川へ沈め様と思ふが、果して此の國を平げ得られるならば、川の中の魚が残らず、酔ふて流れるであらう。」と仰せられました。所が魚は水に浮いて流れました。椎根津彦が是を見て申上げますと、天皇様は大層御喜びに成つて、丹生川上の眞坂樹を抜き取つて、色々の神々を御祭り成されました。

斯くて、天皇様は兵を率て、國見丘に向はせられ、遂に八十梟帥を御誅伐に成りましたが、進軍の時、天皇様は、

神風の伊勢の海の大石にや、い這ひ纏へる細螺の、細螺の吾子よ、吾子よ、細螺のい這ひ纏へり。撃ちてし止まむ。撃ちてし止まむ。

と御歌ひに成つて、兵氣を振はせられました。大石と云ふのは、國見丘に御諭へに成り、細螺は八十梟帥に御諭へに成つたので、御座います。

又一方では、忍坂の邑の大きな土窟へ土蜘蛛の八十梟帥を招いて馳走の際に之を殺させました。是は道臣命が、天皇様の仰を受けて、大勢

の兵士を料理人に仕立て、刀を佩びて居らせ、相圖の歌を聞いたら、一度に起つて、賊を斬り殺すと云ふ計で、御座いました。其處で、大分酒の廻つた頃に、道臣命は起つて歌ひました、

忍坂の大室屋に、人多に來入り居り、人多に入り居りとも、満々し來

目の子が頭槌い石槌い持ち撃ちてしまひ。満々し來目の子等
が頭槌い石槌い持ち今撃たば善からし。

其處で料理人に成つて居た兵士等は、一度に起て賊を殘らず殺しまし
た。餘りに見事に殺せたので、兵士等が天を仰いで大層笑ひました。

道臣命も

今はよく、あゝしやを、今だにも吾子よく。

と歌つて笑ひました。其時に又

夷を一人、百人の人人は言へども、手向ひもす。

と歌つた所を見ますと、土蜘蛛種族は大分勇悍な種族で、夷は一人、百
人に敵する。』とさへ言はれて居たこと、思はれます。然し是の時何
れも酒に酔つたので容易く殺すことが出来たので御座いませう。

此で宇陀郡だけは先づ平定致しましたが、是から進で磯城の賊を御

征伐に成らなければ成りません。して此の磯城には、兄磯城弟磯城と
云ふ兄弟の土豪が居りましたので御座います。此はごうも別派の天
孫人種で土蜘蛛を率ゐて居たものらしく思はれます。其處で天皇様
は先づ御使を御遣はしに成つて御招きに成りました所が、弟磯城の方
は参りましたが、兄磯城の方は参りません。其から更に弟磯城を遣つ
て兄磯城に御説諭がありました。が、どうも参りませんでした。其故
愈御征伐と云ふことに成り、椎根津彦の謀を御採用に成つて、先づ第二
軍に忍坂から進撃させ、賊が殘らず此の方へ馳向つた所を、別に一軍を
遣つて菟田川の水を引いて墨阪の火を消させ、其處から進撃をして、賊
を挟み撃ちに致し、大に之を破つて兄磯城以下の巨魁を御誅伐に成り
ました。

盾並めて、伊那佐の山宇陀村の西南にありの木の間ゆも、い行き伺

候ひ戦へば、吾早や飢ぬ。島津鳥鷗養が輩(輜重兵)今助に來ぬ。
と申す御謠は此の御進撃の時疲れ果てた兵士を御勵ましに成つた御
謠で御座います。百折不撓の御精神を以て、御軍勢を或は勵まし、或は
慰め、以て惡者共の満ちくして居る所を遙々御轉戦に成つた御勇武の
程は、明に御謠の中に見えて居ります。

此の通り、天皇様は遠く紀州路を御廻りに成り、處々で御合戦があつ
て、是から兪鳥見の長髓彦を御伐に成ることに成りました。天皇様は
是の時も矢張り例の通り御元氣勇ましく

満々し來目の子等が、粟生には、菲一本、其根が莖、其根芽繁ぎて、撃て
し止まむ。

満々し來目の子等が、垣下に植ゑし、蠶口疼く、吾は忘れじ、撃ちてし
止まむ。

など御歌ひに成り、勇を奮つて御進撃に成りました。其、吾は忘れじ。
と仰せられたのは、御兄君の御戦死を深く御遺憾に思召されて、御決心
の程を御示しに成つたので御座います。

其から進で御合戦に成りましたのでありますが、鳥見勢は相變らず
慄悍で非常な御苦戦に相成りました。折しも冬の空で御座いました
が、一天俄に搔陰つて霞は御鎧の袖に迸しり、如何にも凄まじい有様で
御座いました。所が黄金色の鴉が忽ち何處からか飛で来て御弓の弦
へ止まり、其鴉が不思議の光を放つたので、追つ駆けて參つた賊兵共は
たちく致しまして、とうく追ひ追らなんだと云ふことです。元來
長髓彦の居た處は長髓邑と申し、從て彼をも長髓彦と申したので御座
います。是の時から鴉邑と云ふ名に改め、遂に鳥見邑と訛る様に成つ
たのちやと傳へて居ります。

是の時長髓彦は使を天皇様の御陣所へ參らせまして、「今天皇様は天神の御子ちやと仰せられますが天神の御子は櫛玉饒速日命と申して早く當國へ御降りになつて私の妹三炊屋媛を差上げ可美真手命と申す御子があり私は現に其方を君にして居るので御座います。然るに今天神の御子ちやと稱して御出に成るのは思ふに人の國を奪ふが爲め偽て左様に御名乗り成されるのでありませう。」と申しました。天皇様の仰せられるには「天神にも御子は澤山ある。今其方の君にして居るものが果して天神の御子であると云ふならば必ず何か表の物がなくては成らない。先づ其を見せられよ。」と仰せられたのです。其處で長髓彦は饒速日命の御持ちに成つた天羽々矢一隻と歩鞞を持たせて御目に懸けました。天皇様は御覽に成り、「是ならば眞實ぢや。」と仰せられて直に御自身に御持ちなされた天羽々矢と歩鞞とを其使



日 本 の 建 國

に持たせ長髓彦に御示しに成りました。長髓彦も之を拜見致しまして大に驚きました。然し行掛り上後へ引く譯に參らず可美眞手命が御降參説を主張しましたのにも拘らず猶御敵對を續けました。所から可美眞手命も今は是迄ぢやと思ひまして乃ち長髓彦を殺し御陣屋へ來て降參を致し其家に傳はつた十種の寶物を献上致しました。天皇様も其志を御譽めに成つて深く御寵遇に成りました。

此で重なる御敵は平ぎましたが、また層富郡(添上郡添下郡)の波哆の丘(今山邊郡)に屬すに新城戸畔と云ふ土蜘蛛が居り、和珥坂(今山邊郡)朝和郡(今山邊郡)の下に居勢祝と云ふ土蜘蛛が居り、臍見の長柄丘(山邊郡)朝和村(長柄)に猪祝と云ふ土蜘蛛が居りました。依て新に降參を致した可美眞手命などが其手の兵を遣つて手分をして之を滅ぼしました。又高尾張邑(葛城郡)葛城の土蜘蛛は胴が短く手足が長いものであつたさ

うですが、此は葛の網を拵へて、其で掩ふて殺したと云ふことで御座います。

越し方を考へて見ますと、日向を御出發に成りましてから最早十幾年と云ふ年が立ちました。其間御軍勢は實に數へることも出来ない程の難儀に出逢ひまして、途中で討死をしたものも御座いますし、御供に後れたものも御座います。のみならず天皇様の一番上の御兄様であつた五瀬命は、どうく御陣歿に成り、次の御兄様稻飯命三毛入野命の二方は途中で御還りに成つたので御座いますから、大抵の御方であるならば、どうに半途で御志を挫かれる筈であります。が、流石は神武天皇様で御座います、少しも御屈撓なされた御様子はなくつて、何時も非常な御元氣で入らせられ、種々の手立を以て御供の人々の失望を御勵ましに成つて、遂に全く葦原中國を御平定に成りました。其御勇氣

御忍耐の程は只々恐入るの外ありません。眞に千古の御英主と申すべき御方で入らせられました。

(五) 建國 (下)

神武天皇様は、豫て御目指に成つた大和へとうく御討入りに成り、愈中原地方を御平定に成つたので御座います。此頃世は未だ開けな

い際で御座いまして、人民の住所など、云へば實にむさぐるいもので御座いました。所謂夏は巢に棲み冬は穴に住むと云ふ時代であります。

其處で天皇様は仰を下されまして、大和高市の郡畝傍の山の巽の角の榎原と申す處へ、皇都を御奠めに成り、御宮室を御建てに成つて、始めて我が日本國の天子様の御位に御即きなされました。神日本磐余彦

火々出見天皇と申上げ、後に神武天皇様と云ふ御諡號を差上げたので御座います。其から媛蹈躰五十鈴媛命を皇后に御立てに成り、神籬を設けて高皇產靈尊、神皇產靈尊など八柱の神を祭らせられ、天富命に齋部を率て天璽の鏡、劍を捧げて正殿へ御奉安申上げ、天種子命は天神壽詞を奏上致し、可美真手命は内物部を率て武器を備へ御警護を致し、道臣命は來目部を率ゐて御門の御警衛に立ちました。其他多くの御家來達は何れも參内を致して御慶を申上げ、始めて斯の日本國が出来上りましたので御座います。其昔天照大神様が「豐葦原瑞穗國は吾が子孫の王に成るべき國である。」と仰せられた御勅諭は、是の時愈御成就に成つたので御座います。是が我國の紀元第一年で、現に我々の紀元節と曰つて御祝を申上げる日が即ち是の御即位の日に相當して居る日で御座います。

ですから、我々は年々紀元節を御祝申上げます毎に、此の建國の御事蹟を憶ひ出しまして、何の様な御骨折で我が日本が國家と云ふものに成つた乎と云ふことをよく考へ、さうして我々の今日御奉戴申上げる天皇陛下の御先祖で入らせられる此の神武天皇様に、深き感謝を捧げなければ成らないのであります。又天照大神様を始め、我邦の建國に就て、長い間限りの知れない御盡力を戴いた方々へも、同く深い感謝を捧げなければ成らないのです。序に我邦最初の御國母に成らせられた媛蹈躰五十鈴媛と申上げた方は、どう云ふ方であつた乎と申しますと、此は所謂玉牆内國の舊主人であつた出雲の大國主神の御子孫で、大層美しい御方であつたと云ふことです。是より前に天皇様は高佐士野と申す野へ御出ましに成りまして、七人の乙女に御逢ひ成されましたが、其中に媛も居られたの

日 本 建 國

で御媒酌の大久米命が歌を以て天皇様へ、

倭の高佐士野を七行く乙女ども誰をか覓かむ。

と申上げますると、天皇様は一番前に居られるのが媛ぢやと御察しに相成りまして、矢張御歌で、

かつくもいや先だてる可愛をし、覓かむ。

と御答へに成り、命から媛へ御話が傳へられ、其から媛の狹井川の家へ御行幸に成り、遂に御入内を致すことに成つたのぢやと傳へて居ります。

又御即位式のあつた翌年には、建國の際に手柄のあつた人々へ其々御褒美がありました。即ち道臣命は築阪と申す所へ屋敷を賜はり、大目來部の兵士は畝傍山の西の川傍へ置かせられ、椎根津彦は倭の國造に成り、弟猾は猛田(大和宇多郡)の縣主に成り、弟磯城(名は黒速)は磯城の



日本國の建

縣主に成り、其他高皇產靈尊五代の孫であつた劍根と云ふのは、葛城の國造に成り、彦己曾孫保理命と云ふのは、凡河内の國造に成り、阿多根命と云ふのは、山城の國造に成り、天降天牟久怒命の孫であつた天日鷲命と云ふのは、伊勢の國造に成り、東征の御供を致して参りました美志印命と云ふものは、素賀遠州佐野郡素賀村の國造に成り、神皇產靈尊の五世の孫であつた天道根命と云ふのは、紀伊の國造に成りました。又高魂尊の五世の孫で建彌己己命と申します人は、改めて津島縣(對馬)の直に成りました。して見ますると、是の時の我邦は今の畿内を中心にして、伊勢遠江邊から西の方だけであつたものと見えます。

(六) 建國後の日本

我が日本國は、遠くは伊弉諾伊弉冊の二尊及天照大神様以下の御骨

折に由り、近くは神武天皇様の非常な御骨折に由つて、初めて出來上つたので、御座いまして、神武天皇様の時から漸く眞成に國家と云ふもの、体裁を具へることに成つたのであります。然し國の廣さは前にも申しました通り、ほゞ伊勢遠江以西と云ふ位の事で、後の世に日本と申しまする總ての地方へは未だ擴がつて居りませんでした。然らば其は何時頃から廣がり、國の仕組が何う云ふ工合で完備をした乎と申しますと、ほゞ斯うであります。

其廣さから申しますと、神武天皇様から第十代の崇神天皇様の時に、最早關東までも幾分か開化が屆きました。又一方は同天皇及次の垂仁天皇様の時に成つて、朝鮮半島の任那へも我が鎮營を置くこと云ふ程に成りました。殊に第十二代の景行天皇様の時は、西は九州へ御親征に成り、東は皇子日本武尊をして奥州の一部までも御征伐をなさせら

れて、我が邦の領地は大分擴がり、第十三代の成務天皇様の時に、其地へ悉く國造を置かれました。此で日本はほゞ本洲四國九州を領する様に成つたので御座います。

又其人種から申しますと、土蜘蛛種族は早くから天孫人種と雜居をして互に混じて仕舞ひ、アイノ即ち蝦夷人は日本武尊の東征があり、第卅七代の齊明天皇様前後に度々の北征があり、第五十代の桓武天皇様の時に成つて、全く討平が出來、一部は今の北海道へ渡り、一部は本土の人に混じりました。其から九州の熊襲種族も第四十五代の聖武天皇様の時に全く討平が出來て、是亦天孫人種に混じりました。其間に朝鮮人支那人の歸化するものが大分ありました。是も同く内地人と混同を致しました。今の日本人は此等の人民が混同をして、一の人種を成すに至つたので御座います。

日本建國

其から開化から申しますと、神武天皇様が御建國に成つた後、第九代の開化天皇様頃に幾分か進歩を致した様で御座いますが、殊に第十代第十一代の崇神垂仁兩天皇様の時に著しく進みました。第十五代の應神天皇様第十六代の仁徳天皇様の時は更に大に進み、次は第廿一代の雄略天皇様の時、第卅三代の推古天皇様の時を経て、第卅八代の天智天皇様の前後に成り、最早立派な文物粲然とも云ふべき程の國に成つたので御座います。

家庭史 日本建國 終

明治卅七年十二月廿九日印刷
明治卅七年十二月廿九日發行

定價 十二錢

著者 塚越芳太郎

發行者 福永文之助

印刷者 村岡平吉

發行所 警醒社書店

印刷所 福音印刷合資會社



東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地





塚越停春著

○家庭史譚 (二月の巻)

定價十二錢 郵税二錢

太田道灌之事蹟 (簞端の富士)

一月の巻簞端の富士は太田道灌の傳記で、江戸城の創建者として有名なばかりでなく、文武兼備の勇將でありました。夫を著者が得意の筆で平易に面白く記述したので、家庭史譚として、誠に上乘のものです。



松浦政泰君校定

○^英文ガールフレンド少時の家庭 價三十錢

○歐米名士の家庭 價七十五錢

○歐米家庭德育佳話 價五十錢

○^{田村直臣君著}歐米家庭美譚 價卅五錢

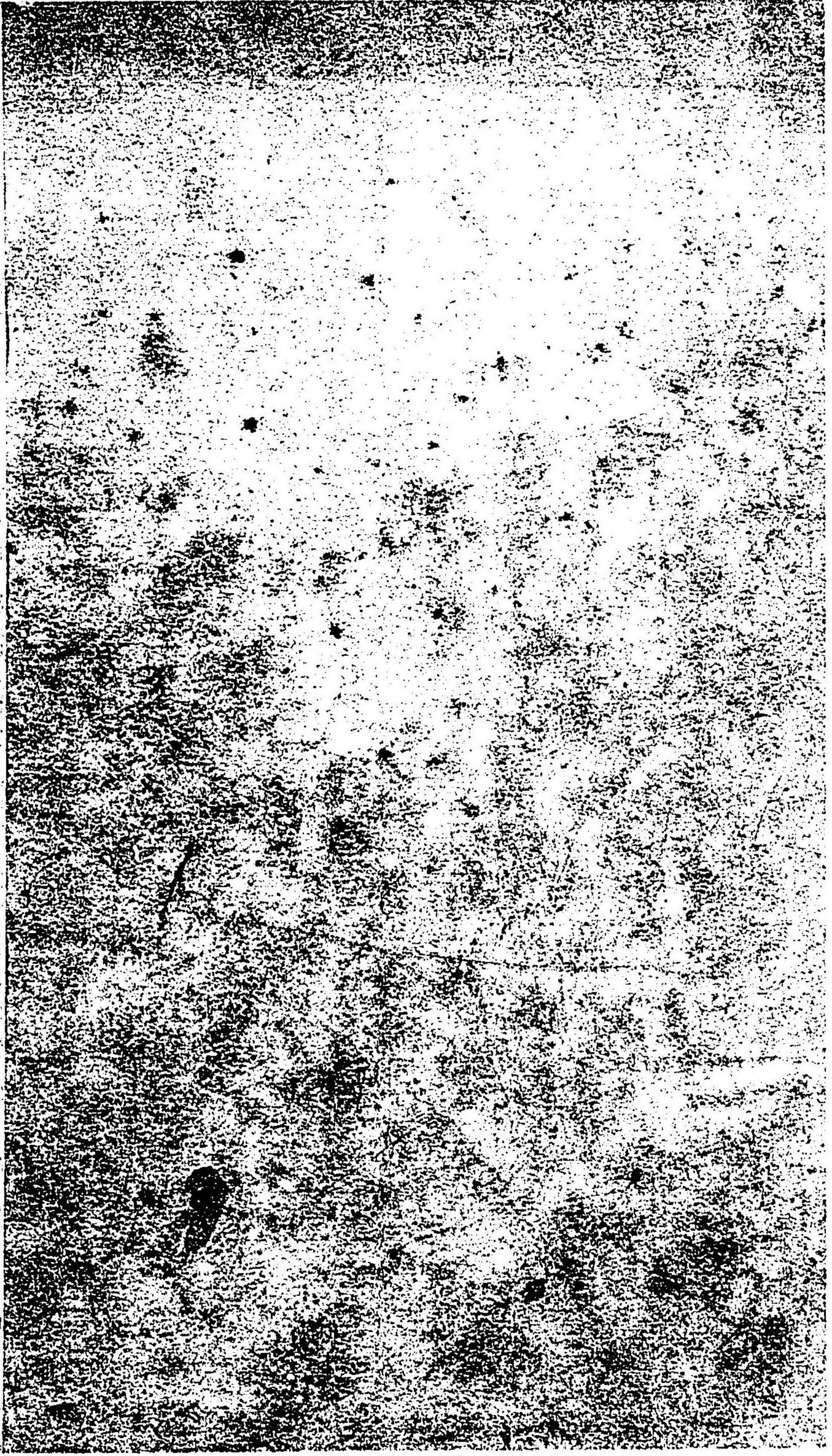
○^{田村直臣君著}母と子供 價十五錢

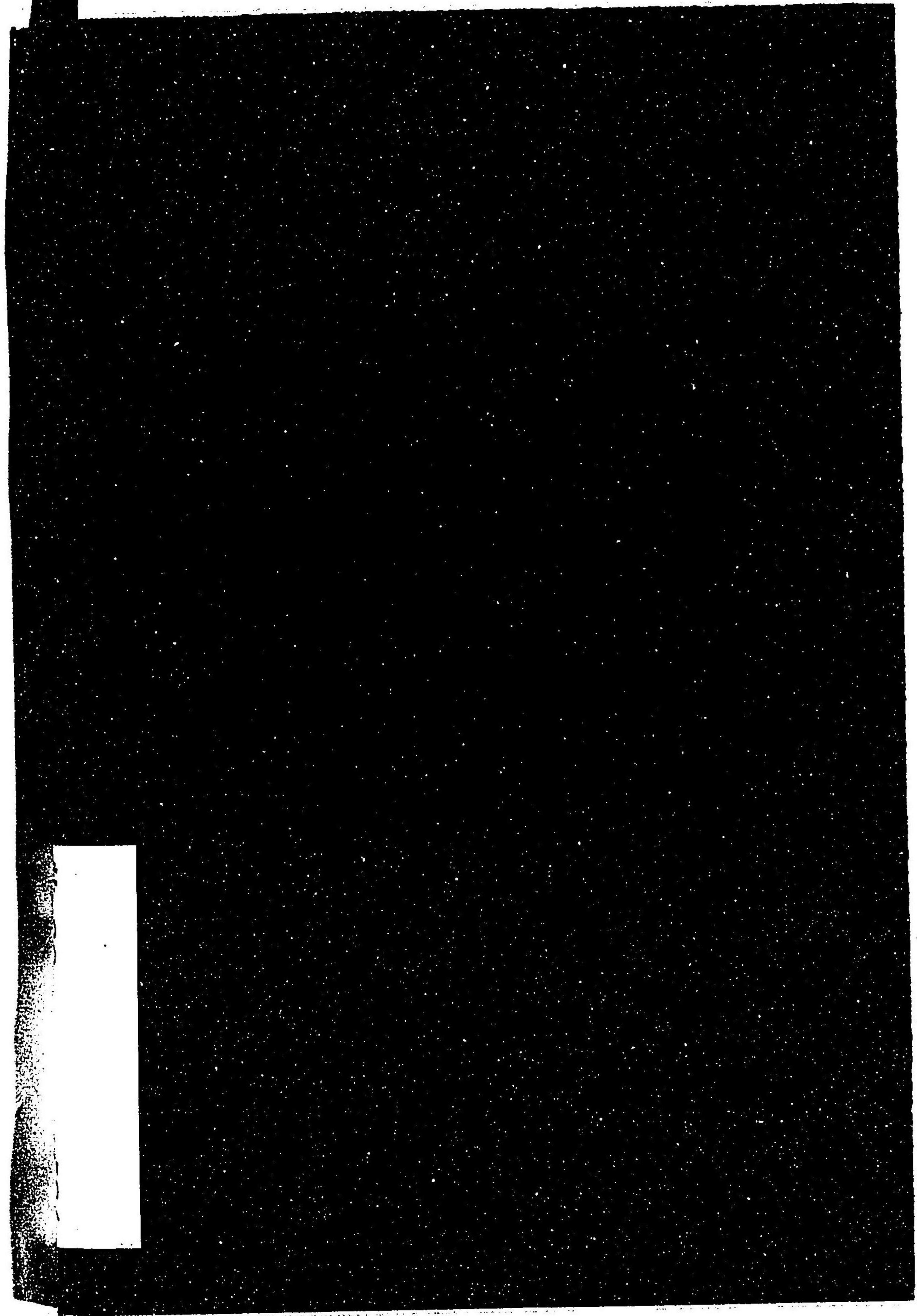
○^{緑岡隠士著}母と妻 價二十錢

○^{緑岡隠士著}少女 價廿五錢

○^{スミス夫人著}家庭教育 價十五錢

○^{松山俊君編}はひ草 價十八錢





A small, vertical, white rectangular label or sticker is positioned on the left edge of the dark area. The text on the label is illegible due to the high contrast and low resolution of the scan.

特 20

584

家庭史譚
二月の巻 日本^の建国

国立国会図書館

001613-000-7

特20-584

日本の建国

塚越 芳太郎/著

M37

ACB-4241

